

ブラジル移民とキリシタン

東光 博英

1908年4月28日、最初のブラジル移民を乗せた笠戸丸が神戸港を出帆した。今年はちょうど百周年に当たる。日本人移民はブラジルのサントス港に上陸すると、列車でサンパウロ市の移民収容所に向かい、そこで数日過ごした後、コーヒー農園に配属された。後の移民も同様であったから、サンパウロ市は日本人にとって最も関わりの深い街であり、日本人街はその象徴といえるが、笠戸丸から1世紀を経た今、同市は1000万以上の人口を擁する南米最大の都市に成長し、ブラジル経済の中核を担っている。

しかし、初めからそうなるべく建設された街ではない。その発祥を迎れば一つのささやかな宗教施設に遡る。現在、都心にパティオ・ド・コレジオと称する場所があり一宇の教会が建っている。ここに1554年1月25日、イエズス会宣教師のノーブレガヤアンシエッタらがコレジオ(学院)を建て、同日が聖パウロの祝日であることからサンパウロと名づけた。市名はこれに由来する。すなわち、当初、海岸地帯の町サンヴィセンテにあった学院を、よりいっそう原住民の教化に適した内陸部の高原ピラティニガの原野に移すという宗教的な動機が都市の形成に繋がっていったのである。今日サンパウロ市創設者の一人とされるアンシエッタ神父の伝記(1598年作)には当時の様子について、「彼ら(神父)の家屋もまたひどい粗造りで、非常に小さなものであった。そのため、台所から出る煙がもうもうと立ちこめるので、表に出て厳しい寒さと霜に耐える必要があったほどであり、しかも、その方が部屋の中で煙に咽んでいるよりは楽であった。…彼らはハンモックのほかに寝台にあたる物を持たなかったし、ハンモックの下でインディオ風に焚く火以外に毛布に相当する物も持たなかった。そのため、寒さは大変厳しく感じられ、午後の授業が終わると教師と学生らはともども薪を捜しにゆき、それを背負って持ち帰ることが必要であった」(拙訳)とあり、原住民の習慣を取り入れた質素な生活が窺える。

だが、信仰の聖地となるべきこの場所が数世紀後、彼らが本来忌避すべき物欲の巨大都市に変貌しようとは夢想だにしなかったであろう。そして街を急速に成長させたコーヒー経済の労働力として、ドイツとイタリアに続いて日本移民が多数導入されたわけだが、実は興味深いことに、そのなかかつて徳川幕府のキリスト教禁制の時代に迫害のため潜伏した日本人信徒(いわゆる隠れキリシタン)の末裔が含まれていた。彼らは福岡県今村(現、大刀洗町)の住民で、同村では1868年に露見・捕縛されるまでほぼ全村民が数百年間信仰を秘匿してきたのであり、明治政府による禁制廃止後、外国人宣教師の教導の下、改めて洗礼を受け信者となった、いわば復活キリシタンであった(海老沢有道「筑後国御原郡今村の復活切支丹」)。1912年、第4次移民により100名が、またその翌年にも第5次として100余名がブラジルに集団移住している。貧困から脱却するための出稼ぎが目的であったという。しかし禁制が廃止されたとはいえ、長らく日本国民に浸透していたキリスト教に対する邪教観がすぐに払拭されるはずもないから、信仰の完全な自由を得たいというのも動機の内にあつたに違いない。

笠戸丸の乗船者名簿である「伯刺西爾行移民名簿」(国立国会図書館蔵)によれば、移民781名の出身県のうち最多の上位3県は沖縄325名、鹿児島172名、熊本78名で、実に7割以上を九州出身者が占めている。その後の移民も同様ならば、キリシタン時代に九州は布教と南蛮貿易の中心であったから、ほかに末裔がいるかも知れない。移民の中にこのような人々がいたことも移民史を飾る1ページであり、これをひもとけば優に百年を超える歴史が展開するのである。それにしても、わが国にキリスト教が伝来した頃、遙かかなたのブラジルに開かれた聖人の街が20世紀になって、ザビエルの蒔いた種の子孫を迎え入れることになるとは何と奇しき因縁であろうか。

とうこう ひろひで(非常勤講師・日本・ポルトガル交渉史)